

## あとがき

佐谷画廊  
佐谷和彦

当画廊恒例の「オマージュ 瀧口修造展」も今年で11回目を迎える。今回は〈実験工房〉がテーマである。〈実験工房〉の1951年から57年にわたるしごとを同人作家の同時代の作品によってご覧いただくとする展覧会である。

展示作品は次のとおりである。

### 1. 美術部門

大辻清司，駒井哲郎，北代省三，福島秀子，山口勝弘，以上5氏の絵画・写真作品。

### 2. 音楽部門

佐藤慶次郎，鈴木博義，武満徹，福島和夫，湯浅譲二，以上5氏の楽譜作品。

### 3. 詩・評論部門

秋山邦晴氏の詩(原稿)。

4. 〈実験工房〉の活動記録写真(大辻清司，北代省三，鈴木博義氏撮影)

この展覧会に付随して本カタログを刊行した。編集にあたっては、山口勝弘(造形部門)，秋山邦晴(音楽部門)と私とで討議を重ね、その方針をもとに福住治夫氏が編集の、大石一義氏がデザインの労をとられた。内容についてはご覧のとおりであるが、展示作品をおもにならない照明家の今井直次，ピアニストの園田高弘氏にもそれぞれコメントをお寄せいただいた。「年譜」については、その原資料を作成された北代省三氏のご協力をえたことを記しておきたい。

さて、今回の「オマージュ 瀧口修造展」のテーマに〈実験工房〉を選んだのは、わが国の戦後美術史のなかでその名はつとに聞こえていたにもかかわらず、これまでそのしごとの全貌が一部を除いてよく知られないままに40年を経過してきたからである。そこでこの際、同人の皆様がお元気なうちに、少しでもその実体に迫ることができれば、とこのようなかたちの回顧展となったのである。

周知のように、このグループの命名者は瀧口修造先生であるが、考えてみると、先生がひとつのグループの仕事に、陰に陽に、これほどの情熱を傾けられたことはきわめて珍しい。先生はどちらかというと作家のひとりひとりとダイレクトにつながりをもたれた方だ。作家のほうもそう思っているのだ。各作家はそれぞれ波長の異なる音波で直接、先生と交信している。孤独な作家たちはそうした交信によって元気づけられ、しごとを

続けたのである。ところが〈実験工房〉の場合は、瀧口先生と一グループとの交信であった。そこが興味深い。

〈実験工房〉が正式に結成された1951年、瀧口先生48歳、メンバー諸氏は20歳代の若者であった。瀧口先生が彼らの「実験」をどれだけ評価し、その将来にどれだけ期待をかけていたかは、本カタログに再録させていただいた先生の文章の端々にうかがえる。まことに、造形、音楽を核として各芸術ジャンルの融合をはかり、新しいものを生みだそうとする〈実験工房〉のまさしく実験的な仕事は、時代を先どりするものとして、現時点でこそ改めて評価されるべきだと私は考える。

ところで私と〈実験工房〉とは、もとより直接のつながりはない。それが結成された1951年かというと、京都大学経済学部の学生(2年生)で、この運動のことなど知るよしもなかった。

だがしかし、間接的にしろ、かすかなつながりをつけられないでもない。1953年4月、私は銀行(農林中央金庫)に就職し東京に来たのであるが、しばらくして銀行の大講堂で『北斎』なる映画を見たのである。おそらく映画同好会あたりの催しであったろうか。北斎版画の大写しの画面がまるで劇画のように次々と移り変わっていったのをいまも鮮やかに憶えている。この映画は瀧口先生のシナリオになるもので、さらにそれが先生の意にそまぬかたちで発表されたことをさらにのちに知ったのである(そのへんの事情については、『コレクション瀧口修造』第6巻映像論、みすず書房、に詳しい)。〈実験工房〉そのものとは関わりはないにしても、こうして私もまた、若いときに、瀧口修造先生の「実験精神」の一端にふれえたといつていいかもしれない。そこに〈実験工房〉展を開催することになった必然性のよなものを感じるのである。

この展覧会がささやかながらひとつのステップとなり、新たな戦後日本の美術史の見直しの機運が沸きあがってこないものか、と思う。もっとも、この種の展覧会の開催は、一画廊の力では自ずから限界がある。さらに大がかりな〈実験工房〉展をしかるべき美術館で企画・実現されることを願ってやまない。わが国の現代美術の活性化のためにやるべきことはまだまだ多いのである。

最後に、この展覧会とカタログのためにご協力いただいた〈実験工房〉同人の皆様にご心から感謝申し上げます。瀧口修造、駒井哲郎、山崎英夫のお三人を除いては全員お元気で、それぞれの道でご活躍中である。皆様のますますのご健勝をお祈りしたい。

あわせて瀧口綾子夫人、駒井美子夫人のご協力に感謝し、ご健勝をお祈り申し上げます。

1991年6月10日

## 海藤日出男氏の急逝に想う

今朝10時半、海藤日出男さんの訃報に接した。一昨日、6月22日に急逝、享年79歳。私はこの突然の報せに驚き、とるものもとりあえず、12時半からはじまる告別式に間に合うよう荻窪の式場にかかけつけた。ちょうどこの日は私の家の引っ越しと重なり、喪服はどこかへしまいこんで見つからず、チグハグな服装で行かざるをえなかった。そういえば、昨夜9時過ぎ、舞鶴で父の百ヵ日の法要をすませて帰ってきて荻窪で車を待っていると、「海藤家」という葬儀用の立て札が目に入った。そのとき、海藤さんのことが一瞬脳裏をかすめた。海藤という苗字は少ないが、まさか海藤日出男さんではあるまい。いや、あるはずがない。海藤さんはお元気のはずだし、お住まいは渋谷だから、とひとり決めて帰途を急いだ。しかし、いまにして思えば、そのときすでに氏は亡くなっていたのである。何とも心残りである。

周知のように、海藤日出男さんは、我が国の戦後の現代美術を舞台裏から支えてきた希有な存在であった。その生き証人でもあった。私もたびたび氏から、おもしろいエピソードを交えた貴重なお話をうかがった。瀧口修造氏を美術の世界に深入りさせたのも氏である。そもそも、〈実験工房〉結成のきっかけをあたえたのも、ほかならぬ氏なのである。私はそのようにこの運動に深い関わりのあった海藤さんに、当時の状況をあらためて伺いたいとお会いする約束をしていた。いま私の手帳をめくってみると、4月27日の予定になっていた。ところが、その前日、海藤さんからお電話をいただき、ちょっと体調をくずしているから延期しましょう、との申し入れがあった。お元気な声であった。私のほうもすぐ後にニューヨーク、パリへの旅を控えていたので、では帰ってきてから旅の話でも、ということになっていたのである。5月29日に帰ってきてから、気にしながらも雑事にまぎれ、こうして氏との告別式に臨むことになってしまった。もっと早く連絡をとっておけばよかった。何とも残念である。

海藤さんは「オマージュ 瀧口修造」展についても当初より深い関心をよせられ、私のほうも折りに触れて助言をいただいております、ありがたく思っていた。第7回、1987年の「マルセル・デュシャンと瀧口修造」でも、海藤さんが制作に当たられた瀧口さんの『マルセル・デュシャン語録』についてのエッセイをカタログにご寄稿いただいている。今度のこの展覧会もずいぶんたのしみにおられた。氏には、とくに見ていただきたかった。

告別式は海藤さんの遺言により無宗教形式で、ごく限られた参集者のなかで簡潔に、しめやかにおこなわれた。海藤さんらしく、ジャーナリストとしての無名性を最後まで貫かれたのが見事だ。その節を曲げない厳しさに私は強く胸を打たれる。心からご冥福をお祈り申しあげる。海藤さん、ありがとうございました。

1991年6月24日